

中国 太白山天童寺を歩く

天童寺伽藍をゆるやかに登っていく石畳の坂道。古刹の静けさが身にしみるようだ。



伽藍右手にある宋公開のお堂。どっしりとした重みのある壁がこの寺の年輪を感じさせる。



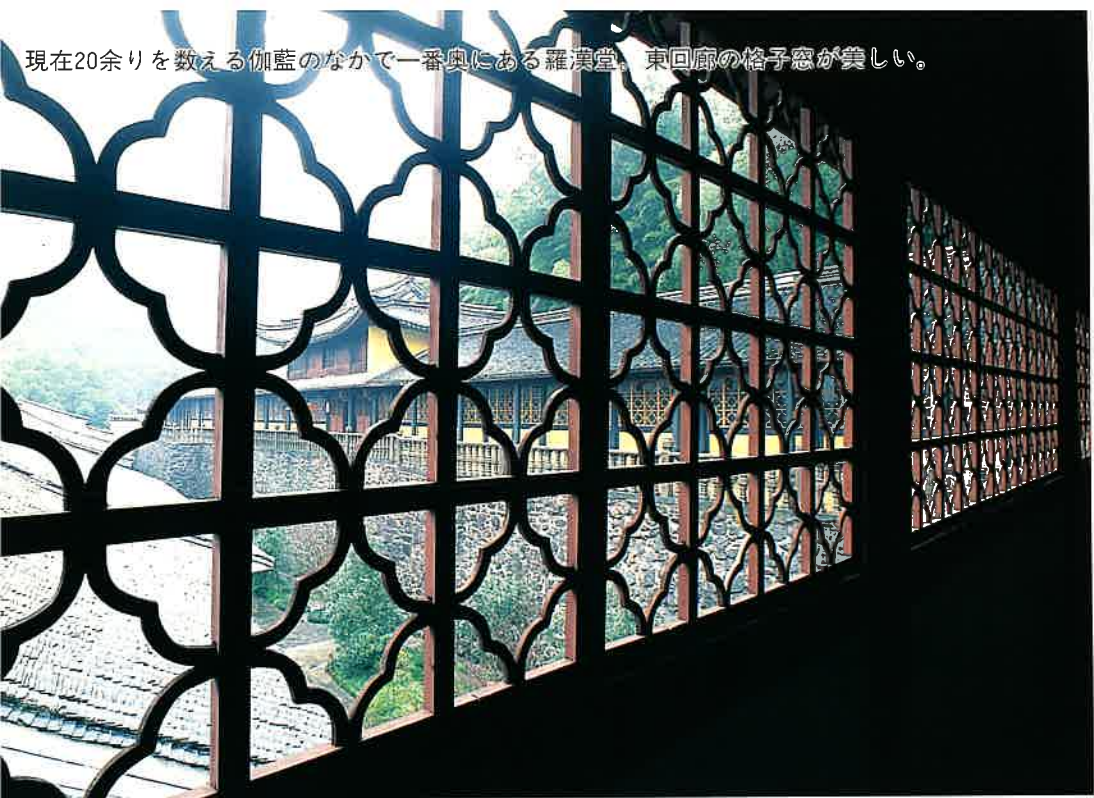


仏殿は、いわば天童寺の本堂である。手前の廊下など日本にはない建築様式である
本尊は、中央釈迦如来、右が薬師如来、左が阿弥陀如来の三世仏である



内方工池の北側には天王殿があり、四天王が、参拝者を見おろすように立っている。

現在20余りを数える伽藍のなかで一番奥にある羅漢堂、東回廊の格子窓が美しい。



太白山天童寺は、阿育王寺などと並んで中国五大古刹に数えられる中国禪宗の名刹である。曹洞宗の祖、道元禪師がこの寺で修学し、住持の如浄禪師のもとで正伝の仏法を体得して今日ある曹洞宗の源泉を日本に導入したことで、日本仏教にとっても極めて重要な意味をもつ寺である。

福井県の大本山永平寺は、この寺の伽藍様式を移したものといわれ、今日我々が天童寺を訪れて、ことさらに親近感をもつのも、たたずまいが永平寺のそれと似ているためもあるのだろう。

天童寺は晋の永康元年（三〇〇）、僧義興が庵を結んだのにはじまり、唐の開元二〇年（七三二）に僧法璿が精舎を営んだ。これを俗に「古天童」という。至徳二年（七五九）に現在地に伽藍を遷したのが今日の天童寺となった。その後、名称も変わり、伽藍の倒壊・再建等、幾多の変遷をくり返したが、清代に現在の伽藍がほぼ出来たと伝えている。



大伽藍の右後ろの丘に登ると天童寺の七堂の重畳たる堂宇が見える。



羅漢堂の美しい瓦が、この寺の年代の重みを伝える。





東回廊の天井から大きな魚板が下がっていた。



仏殿正面にある丸窓と前廊下。中国建築の美しさを伝えるものだ。



法堂の軒下に咲く白梅が春は天童寺の最も美しい季節である



文化大革命後に建立された道元禪師得法靈蹟の碑である。



西回廊を法具をかついで寺衆が歩く。



天王殿内陣。四天王がいかめしく参拝者を見つめている。



西回廊中央にある祖師堂内陣。歴代和尚の位牌が並ぶ。



西回廊全景。柱とその礎石がこの廊下の美しいアクセントになっている。



東回廊を行く僧侶。春三月になっても山あいのこの寺はまだ寒い。

太白山のある鄞県は、ゆるやかな丘が幾重にも連なる静かなたたずまい。
春は見わたす限りの菜の花が咲きほこる。

